



リバティソリューション
片山 隆雄 さん

転倒防止につなげたい

「現場のニーズに応える難しさを改めて実感した」と話すのは、介護福祉機器製造販売の(株)リバティソリューション（松江市西嫁島1丁目）生産管理部の片山隆雄部長（64）。島根大医学部付属病院看護部（出雲市塩冶町）と今年3月、ストレッチャー用滴下漏水防止シート「リバティしずくガード」を開発、自社で開発窓口を担当した。

入院患者をシャワー用ストレッチャーに寝かせての入浴後、病室に戻す際にぬれたストレッチャーから水滴が落ち、転倒事故につながるのを防ぎたいとの要望を受けて開発に着手。試作品を現場に持ち込み、実証実験と改良を重ねた。さまざまな問題に直面して試行錯誤を繰り返した末、水滴の落下を減らし、看護師がストレッチャーを拭き取る時間を短縮する効果を出した。年内の販売開始を見据え、「転倒事故を減らせ、市場ニーズはあると思う。看護師の負担軽減のためにも広く普及してほしい」と期待する。（堀江純一郎）



境港市地域おこし協力隊
仲里 心平 さん

シャツで伯州綿をPR

境港市の地域おこし協力隊員の仲里心平さん（35）が、得意の洋裁技術を生かし、市が特産化を目指す伯州綿を素材にしたシャツを自作した。中村勝治市長や栽培を手伝う市民サポーターに着てもらうなどして、伯州綿のPRに役立てたい考え。「清涼感があり、ざっくりとした点が特徴。伯州綿のファンになってもらうためのツールとして活用したい」と話す。

横浜市出身で、山梨県内の化学繊維メーカーを退職して2017年、境港市の地域おこし協力隊員として着任。伯州綿の栽培などに携わっている。専門学校で洋裁を学んだ経験から「伯州綿の魅力を知ってもらうために」とシャツの製作を発案。伯州綿を横糸に使った「境港手拭」用の生地を活用し、1枚ずつ縫製しながら3種類、計14枚のシャツを仕上げた。

11月上旬の伯州綿のPRイベントで展示した際の評判も上々。「シャツを着て、独特の手触りを体全体で感じてほしい」と望んでいる。（園慎太郎）

記者 COLUMN
巷街談

若者の力

高校2年生の弟はラグビー部に所属している。私が就職で島根に帰郷したため、秋にある県大会は昨年、今年と続けて家族で見に行った。

島根県内のラグビー部は2校しかないため、初戦がいきなり決勝。相手は毎年、強豪の石見智翠館高校だ。今年は100点以上の差を付けられて敗北。閉会式では「強豪相手に粘り強い守りを見せた」と、昨年と同じような言葉を掛けられていた。

帰宅後、テレビ放送された試合の録画を一緒に見ていた弟は「ここ惜しかったなあ」「ナイス」とつぶやきながら、自分たちのプレーをもう一度復習していた。昨年に続き無得点で負けたことに、私は「ファウルを狙えば1点取れるんじゃないの」と聞いた。「だってトライしたいじゃない」。弟はキラキラした目で答えた。

10月に出雲市内で開かれた、人手不足について考える企業向けの講演会で、出雲村田製作所に外国人労働者を派遣する(株)アバンセコーポレーション（愛知県一宮市）の社長が「若者は宝だ」と話していたことをよく思い出す。人手不足や後継者不足が叫ばれる今、取材先でも若者を渴望する声をよく聞くが、その理由は漠然と分かっていない。

弟は「負けるなんて思って試合をしたことはない」とも語った。試合で、体格から違う相手にぶつかる姿にいつも手に汗握っていたが、グラウンドで戦う選手たちの頭の中には、間違いなく全国の舞台「花園」があった。熱い思いや強さに触れ、これが若者の力であり、魅力なのだ改めて感じた。

（佐々木歩実）